

大学生はいかにスポーツマンガを読むのか

—— 攪乱的ジェンダー表象をめぐる解釈的インタビューの分析 ——

藤 田 由 美 子*

1. 問題設定

本研究の目的は、スポーツマンガにおけるジェンダーの攪乱／維持に関する解釈的インタビューを通して、スポーツマンガの読みの構造を明らかにすることにある。

スポーツメディアにおけるジェンダーの内容分析研究では、男性優位性が明らかにされてきた。たとえば、スポーツ報道における女性アスリートの女性性の強調や固定的なジェンダー規範の提示（飯田，2003）、スポーツマンガにおける「男性に支えられなくては存在し得ない女子プレイヤー」の描写（国枝・松栄，2009）等である。また、スポーツメディアの送り手を対象にした研究では、スポーツ報道の担い手に女性が少ないことが明らかにされた（飯田，2008）。しかし、メディア内容に対する受け手（読み手）の解釈を分析した研究は、ほとんど行われていない。

そこで、筆者は、「メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダー・セクシュアリティおよびその解釈」というテーマで、2009年度から2011年度にかけて研究を実施した⁽¹⁾。この研究においては、第一に、スポーツマンガにおけるジェ

* 福岡大学人文学部教授

ンダー・セクシュアリティに関する内容分析を実施し、第二に、ジェンダーを攪乱する表象を有するスポーツマンガについて読み手の解釈的インタビューを実施した。このうち、第一の研究成果については、すでに論文として公表した(藤田, 2011, 2012)。本稿は、第二の研究の成果報告(藤田, 2012b)をもとに、近年の研究動向を踏まえ加筆修正を加えたものである。

スポーツに関するメディア内容の読み手による解釈を研究するにあたり、「アクティヴ・インタビュー」(Holstein and Gubrium 訳書, 2004)の知見は有用である。メディア内容は、読み手に直接的に影響を与えるばかりではなく、社会的文脈での自己および他者とのかかわりのなかで解釈され、再構成されるからである。たとえば、スポーツマンガにおけるジェンダー描写を、読み手がどのように解釈するかは、かれら自身の学校教育を含むスポーツ経験や過去のメディア経験などが関連するだろう。

そこで、本稿では、スポーツマンガにおけるジェンダー描写をめぐる読み手の解釈に関するインタビューの分析結果を提示する。ここでは、アクティヴ・インタビューの考え方を応用した分析によって、当該作品をめぐる調査者と読み手の、それぞれのスポーツ経験等を踏まえた相互作用的な解釈のありようを明らかにすることを目指す。

2. スポーツマンガとジェンダー表象 —女性描写への注目を中心に—

本稿の問題意識を明らかにするために、まず、スポーツとジェンダーに関する先行研究を概観し、続いて、筆者が行ったスポーツマンガの内容分析の成果について概説する。

(1) スポーツとジェンダーに関する先行研究

社会学の領域において、スポーツとジェンダーの問題に着目した研究は、ハー

(2)

グリーブズの『スポーツ・権力・文化』である（Hargreaves 訳書，1993）。ハーグリーブズは、イギリスの大衆文化としてのスポーツを歴史社会的に分析するなかで、階級とジェンダーの再生産の問題にも言及している。たとえば、かれは、メディア・スポーツにおける性のイメージが、家族主義・市民的私生活主義の言説と営みに結びつけられることによって、現在の男性ヘゲモニーを再生産する、と論じた（前掲書，p.209-212）。さらに、かれの論考は学校体育におけるジェンダー分割に向けられた。ここで、スポーツに熟達することは男性の領分への導入であることから少年にはスポーツが奨励される，体育の授業において女性はゲームよりはダンスや体操が多い一方でフットボールからは排除されるなど男性ジェンダー・アイデンティティの形成と社会化体制の維持が行われている，体育は「『出来のよい』労働者階級の少年，順応者を学校文化に統合する機能を果たす」（同上，p.241），などの論点を示された（同上，pp.238-242）。

日本では、スポーツと女性，スポーツとジェンダーの問題については、1990年代以降、スポーツの社会学を中心に、女性研究あるいはフェミニズム研究で議論されるようになった。江刺は、中都市の既婚女性のスポーツ参与について分析を行い、日本女性は男性または欧米諸国に比べスポーツ参与があまり行われていないことを明らかにし、それには家庭などでの女性役割観などの観念ばかりではなく女性の社会的地位が関連していると論じた（江刺，1992）。

近年、教育社会学の「教育とジェンダー」研究においても、身体・スポーツが注目されている。一連の研究は、スポーツが「男性支配を正当化する装置である」（多賀，2005）ことを明らかにした。たとえば、羽田野は、中学校柔道部でのフィールドワークによって、男女は同じ空間で同じ練習を行うが性別ごとに異なる基準があること、女子が「男子にはかなわない」ことを了解することを示し、〈身体的な男性優位〉神話の維持を明らかにした（羽田野，2004）。

また、ジェンダー形成に対する学校体育の長期的な影響について明らかにし

ようとした研究も行われている。在木と飯田は、女子大学生が書いた学校体育に関する自己体験記の分析によって、学校体育におけるジェンダー形成のありようを検討した（在木・飯田，2004）。その結果、女子大学生が経験した学校体育を通してのジェンダー形成には、男女の二分法的カテゴリー化、男女の優劣の自明視、性的役割分業およびステレオタイプ、男女の機会不平等、女性の性的対象物化、男性と暴力の親和性、といった要素があることが明らかにされた。

これらの研究の基底には、「男」と「女」というふたつのカテゴリーを、本質として捉えるのではなく、両者に分類された人々が相互行為を通して互いにそのような存在として構築されると捉える視点、そして「男」と「女」の両カテゴリーがともに「男性支配」の構築・維持に加担しているという視点（Hall 訳書，2001）がある。

（2）なぜ「女性」あるいは「二分法」への注目なのか —内容分析の視点—

筆者は、以上のレビューを踏まえた上で、スポーツをめぐるジェンダー／セクシュアリティ表象が、いかに個人のジェンダー形成に関与するかを明らかにするための研究を計画した。まず、スポーツマンガの内容分析によって、スポーツする、あるいはスポーツを指導する主体として描写される女性登場人物を通して示される「スポーツをする女性」の表象を検討した。具体的には、野球マンガ（主として高校野球マンガ）の女性「指導者」の分析、女子バレーボールマンガにおける指導者－選手関係の分析、という二つの分析を行った。これらの分析は、当該登場人物と周囲の登場人物の相互作用におけるジェンダー秩序の攪乱と維持のありようを、フェミニストポスト構造主義・クィア研究の枠組みを用いて検討することを試みたものである。

ここで、フェミニストポスト構造主義・クィア社会学の視点について、概要を説明しておく。

1990年代に従来のレズビアン／ゲイ・スタディーズを批判的に継承し、ポスト構造主義の影響を受けて誕生したクィア研究は、文学、社会学、教育学、スポーツ研究など人文・社会科学の諸領域において、同性愛を異性愛規範における「構成的外部」として定義する「ヘテロノーマティヴィティ」概念を用いて、社会における異性愛主義と同性愛嫌悪を生成する二元的権力性を問題にした（河口，2003）。

クィア研究は、フェミニスト研究にも重要な影響を及ぼした。たとえば、ブレイズは、フェミニストポスト構造主義とクィア研究の立場から、相互作用における幼児自身のジェンダー・ディスコースを分析し、子どもの相互作用には「二元論的なジェンダー」のディスコースがみられること、子ども自身がそのディスコースとは異なるジェンダー・ディスコースのオルタナティブを構築するなどパフォーマンスタイプにジェンダー構築を行っていることを明らかにした（Blaise, 2005）。

それでは、なぜ、本稿において、「女性のみ」を考察の対象とするのか。この限定によって、「二元論的なジェンダー」が前提とされているのではないかと、セクシュアル・マイノリティへの視点が等閑視されているのではないかと、という問いが生じるだろう。

しかし、本稿のねらいは、「二元論的なジェンダー」を越境している女性表象を手がかりに、ジェンダー・ディスコースの多様化の状況を、あるいはそれに対抗する「二元論的」なジェンダー・ディスコースの存在を、浮かび上がらせようとするものである。したがって、本稿は、「女性のみ」を対象としてはいるものの、実は関係論としてのジェンダーの多様化／固定化を考察の対象としているのである。

そして、下記の理由により、女性表象に注目する意義は今なお存在すると考えられる。まず、現在もおスポーツ界において、女性を対象とするセクシュアル・ハラスメントの問題は重要である。また、「異性のもの」とされるスポー

ッへの参入障壁の問題は消失していない⁽²⁾。そして、スポーツを対象とする社会科学的研究においては今なお「男性優位性」が重要な論点のひとつとなっている。

(3) 「越境」と「排除」 - 内容分析の知見 -

本稿でインタビューの分析を行う前に、筆者が行ったスポーツマンガの内容分析について述べる必要がある。内容分析で得られた主要な知見は、下記の通りである。

第一に、女性監督が登場する高校野球マンガの分析（藤田，2011）より、下記のことを明らかになった。

①女性監督は、当初は部員からも排除的な対応を受ける。そこから、男性によって占められる野球界において女性監督は「他者」であるとみなされていることがうかがえる。

②女性監督は、卓越した能力を有することによって、はじめて部員によって承認されることで参入を達成する。

③しかし、部員によって承認された後も、女性監督は、部外の人間によって、性の対象としてのまなざしや「イロモノ」としてのまなざしを受け続ける。

第二に、女子バレーボール部を舞台とするマンガの分析（藤田，2012）より、下記のことを明らかになった。

①1960年代から1970年代のマンガには、男性指導者と女性選手の間にある、疑似恋愛関係を伴う、非対称なジェンダー関係が描写されている。

②1980年代以降のマンガにおいては、女性指導者の登場やスパルタ指導者の消滅などがみられる。そこから、指導者-選手間の関係性の変容がうかがえる。

③一方、1980年代以降の作品においても「ロマンティック・ラブ」の描写がみられる。このことから、女子バレーボールを題材とするマンガにおいて、

異性愛主義は維持されていることがうかがえる。

野球マンガにおいては、女性指導者がホモソーシャル⁽³⁾な特質を有する野球部における「構成的外部」であることが、女子バレーボールを題材とするマンガにおいては指導者－選手関係を中心とする二分法的なジェンダー秩序とその変容が、それぞれ明らかにされた。つまり、スポーツマンガの内容分析からも、スポーツにおける男性優位性、あるいは二分的かつ非対称的なジェンダー秩序の存在がうかがえる。

3. 調査について —インタビューの方法—

本稿では、スポーツマンガの解釈およびメディアとスポーツ経験に関するインタビューを行った結果にもとづき、前節まで述べてきた問題について論じようとするものである。まず、インタビューの枠組みとマンガ作品のエピソード選定、そして調査の手順について述べる。

(1) インタビューの枠組み

インタビューの枠組みは、筆者自身が行った「『私』にとってのスポーツ経験の意味」に関する試行的考察（藤田, 2009）を下敷きとしている。この研究は、筆者自身のスポーツ経験について、リフレクシブな考察を試みたものである。その知見は、要約すると次の通りである。第一に、個人にとってのスポーツ経験は、その人の実践をめぐる他者およびその人自身の解釈の産物である。第二に、スポーツをめぐる実践のありようには、ジェンダーの他、学校文化、家庭での経験などと関連があることが推測される。

私たちは、生活のなかで出合ったさまざまな事象を、自らのこれまでの生活を通して得られた経験にもとづいて解釈する。読み手がスポーツマンガにおけ

るある種の描写に出合った時、彼女または彼は、これまでのスポーツに関する生活経験を手がかりに、その描写を解釈していこう。

インタビューは、調査者と回答者が相互に一定のテーマにかかわる諸事象を解釈し社会的現実を紡ぎ出そうとする実践である。そこで、ホルスタインとグブリアム(Holstein and Gubrium 訳書, 2004)による「アクティヴ・インタビュー」の概念が有効である。ホルスタインとグブリアムは、「現実を経験の「方法と内容」の結節点において、解釈実践を通して構築される」(p.49)という立場より、調査者と回答者が相互に、あるテーマについてのインタビューをめぐる相互にそのテーマをめぐる社会的現実を解釈し構築する、として「アクティヴ・インタビュー」という概念を提起した。

確かに、インタビューは相互行為の産物である。インタビューにおいて、調査者は、回答者のことばから「客観的な事実」を引き出しているわけではない。調査者と回答者はともに、自身の経験を踏まえ、テーマについての解釈を行い、それを互いに提示しあい、テーマをめぐる社会的現実を構築していく。

本稿で提示するインタビューもまた同様である。ひとつのスポーツマンガについて、ジェンダーというテーマをめぐる、読み手すなわち回答者と調査者の相互作用が行われる。

上記の視点を踏まえると、本研究におけるインタビューの枠組みは、下記の通りである。

第一に、人はそれぞれ異なる社会的文脈においてスポーツを実践してきた。

第二に、その人はスポーツを描いたメディアに出合った時、自らのスポーツ経験に照らしてそれを解釈するであろう。

第三に、その人は、あるジェンダー表象に出合った時、その人自身のスポーツも含む過去の生活経験を通してそのジェンダー表象を解釈するであろう。

第四に、その人は、インタビューにおいて、調査者との相互作用によって、インタビューのテーマに関する解釈を生成・再解釈するであろう。

（2）マンガ作品の選定

インタビューで提示したマンガ作品として、野球およびバレーボールマンガのうち、「女性指導者」が登場し、かつジェンダー秩序の攪乱を示唆する描写のあるエピソード、計4話分を選んだ。各エピソードの概要は、表1に示した通りである。

「ステレオタイプの」ではなくむしろ「攪乱的」なジェンダー描写を含むエピソードを選定し提示したのは、読み手のスポーツとジェンダー観を揺さぶり、その結果、それらをより明確にするのではないかと考えたためである。

（3）インタビューの実施

1）回答者

2011年11月から12月にかけて、九州地方および中国地方に在住していた大学生を中心とする13名⁽⁴⁾へのインタビューを行った。

回答者の選定は、下記の手順にて行った。まず、2011年11月から12月にかけて、筆者の担当科目の受講生および知人に対し、研究目的を説明した上で、調査への協力を依頼した。協力を申し出てきた者に対して、さらに詳しい調査手順について文書および口頭にて説明を行い、承諾書の交付および日程の予約によって、調査協力の確約を得た。その際、マンガ作品1話分を手渡し、調査日までに読んでくるように依頼した。

2）手順

調査者（＝筆者）は、回答者に、あらかじめ文書および口頭で研究の趣旨を説明した上で、マンガ作品を、学生には各1エピソード、成人には各2エピソードを、事前に配付した。

マンガ作品の配布から数日後、半構造化面接法による調査を実施した。質問項目は、おおむね、マンガ作品を読んで感じたこと、スポーツおよびスポーツ

メディアに関する経験，であった。ただし，質問の順序および詳細は必ずしも固定しなかった。インタビュー中は，筆者は，回答者のメディア内容解釈と，回答者自身のスポーツ経験との関連づけを図りつつも，ジェンダーを攪乱するメディア描写に対する解釈を，相互作用のなかで紡ぎ出そうと試みた。

インタビューについては，あらかじめ回答者の承諾を得た上で，デジタル録音を行った。インタビュー時間は約 60 分から約 90 分であった。録音データは専門業者によって逐語録化され，本稿の主たる分析データとなった。なお，本稿で分析・考察の対象とする回答者 10 名のスポーツ経験および提示作品は，表 2 に示した通りである。

表1 インタビューで用いたマンガ作品一覧

作品名	作者	エピソード	あらすじ	略号
最強！都立あおい坂高校野球部	田中モトユキ 全26巻, 小学館, 2005-2010	第1話 ペンチ にスマイル勝利 をゲット! (第 1巻, pp.5-72)	菅原鈴緒は、高校時代に選手として叶わなかった甲子園を目指し、都立あおい坂高校の野球部顧問になった。菅原は教職員の無理解と野球部員の造反に、練習試合相手から好奇の視線を浴びる。彼女を甲子園に連れて行くとうと地元少年野球チームの教え子5人が集結し、練習試合に飛び入り参加し、チームを勝利に導く。	あ
おおきく振りかぶって	ひぐちアサ 1-19巻, 講談社, 2003-	第1話 ホント のエース (第1 巻, pp.1-63)	中学時代に野球部の仲間には排除された経験を持つ三橋廉は、ためらめらしい野球も成り行きで、入学した西浦高校で発足したばかりの硬式野球部に入部する。三橋は、マウンドから離れたくないと言う割には自信のなさを表出している。監督・百枝まりあは、三橋に性格を変えるよう言い、三橋の出身校・三星学園高等部との練習試合をすると宣言する。	お
少女フアイト	日本橋ヨヲコ 1-9巻, 講談社, 2006-	第10話 dog's breakfast (第2 巻, pp.95-94)	黒曜谷高校女子バレー部1年の大石練(ねり)は、1学年上で幼なじみの式島滋が選手をやめてトレナーになったことを知る。練は、自分のせいではバレーボール選手を諦めたと思ってしまう。練は、彼女の話を聞いた小田切学(まなぶ)とともに遅刻する。監督・陣内笛子は、遅刻した3人対他の3人との練習試合と、3日間の掃除を言い渡される。練は、学の助言で、選手をやめた理由を直接尋ね、確かめる。	フ1
少女フアイト	日本橋ヨヲコ 1-9巻, 講談社, 2006-	第11話 dog race (第2巻, pp.95-124)	練と学と早坂ナオは、陣内によって1週間後の1年生どうしの3対3ゲームで同じチームにさせられるとともに、罰ゲームとして3日間の掃除を命じられる。練は中学時代の経験をもち、掃除を生かした練習方法を学とナオに提案する。練の提案で初心者にもかかわらずセッターをすることになった学は、式島滋の弟で同級生の未散(みちる)にトスの練習相手をしてくれるよう頼む。	フ2

表2 回答者のスポーツ経験および提示作品

仮名	属性	性別	現在の競技経験	スポーツ歴小	スポーツ歴中	スポーツ歴高	作品
A	学生	女	なし	バスケット、陸上	バレーボール	硬式テニス (退部)	あ
B	学生	女	バレーボール	バレーボール、ミニバスケット、陸上	バレーボール	バレーボール	フ1
C	学生	女	なし	なし	なし (吹奏楽)	なし (吹奏楽)	フ1
D	学生	男	バスケットボール	野球、水泳	バスケット	バスケット	お
E	学生	男	-	ソフトボール	陸上	なし (吹奏楽)	あ
F	学生	女	なし	なし	なし (美術)	なし (美術、文芸)	フ2
G	学生	男	サッカー	サッカー (陸上)	サッカー (陸上)	サッカー	フ2
H	学生	男	フットサル	サッカー	サッカー	サッカー	お
I	学生	男	野球 (サークル)	野球	野球	野球	あ
J	学生	男	サッカー	水泳	サッカー	サッカー	お

注：表中の「-」は、インタビュー中に言及がなかったことを示す。

4. インタビュー回答の分析

（1）回答者のスポーツおよびスポーツメディア経験

表2に示した通り、回答者のほとんどが、大学入学までに、地域のスポーツクラブや部活動などでスポーツを経験していた。競技経験者は、現在もスポーツを行っている者が多い。ただし、この傾向は、学生回答者の多くがスポーツにかかわる専門であることによるものと考えられる。

スポーツメディアの接触経験は、おおむね次のように分類できる。本インタビューの回答者は、下記分類のひとつまたはふたつ以上にあてはまる（各項目の仮名は敬称略とする）。

- ① 自分がしている競技を扱ったマンガに親しむ（B, D, G, H, I, J）
- ② 当時の人気マンガに親しむ（A, D, E, H, I, J）
- ③ マンガ以外のスポーツメディアに親しむ（A, C, F, K）

多くの回答者は、マンガ以外にも含め、スポーツメディアに親しんでいた。それは、回答者の競技経験にかかわらずみられた。たとえば、サッカーマンガなど学校時代の人気マンガへの接触は、かれらの経験した競技の種類にかかわらずみられた。

（2）スポーツマンガの読み取りの特徴

回答者と調査者は、互いに言語的・非言語的コミュニケーションを通して、相互の解釈作業に影響を及ぼしあっていた。スポーツマンガの読み取りの特徴は、下記の通りである。なお、以下の本文およびインタビュー記録（例）においては、回答者の敬称は省略している。

まず、読み取りの一般的な特徴を、例示しつつ述べる。第一に、回答者と調査者は、自らの経験を踏まえ、スポーツマンガの解釈を試みていた。ここで、例1と例2をみてみよう。

例 1

1人すごい自己主張が激しい人がいて、そのグループと、もう1人主人公みたいな感じのグループとが、対立ではないけどそういう感じのことでしてという。結構ほかのやつでもある感じのやつなのかなというふう
に・・・(F)

例 2

(前略)・・・僕も高校の時にうまい選手から教えてもらうとか、一緒にトレーニングしながらで、学ぶというのが多かったんで。練習中は監督のトレーニングで学ぶことを学んで、また自主練で、うまい選手の応用、練習法と一緒にやって基礎につなげるという感じでやってたんで、そこは(学が：筆者注) 練さんが応用したやつについていくというところで、僕は共感を持ちました。(G)

例 1において、Fは、これまでに読んだマンガとの比較で、スポーツマンガに、「主人公」対「個性の強い(ライバルあるいは敵)キャラクター」という関係性など、一定のパターンがみられることに言及している。また、例 2より、Gが、競技は異なるが自らのスポーツ経験に即して、エピソードの解釈を行っている。

上記より、回答者は、自らの競技経験の有無、または競技への取り組み方、スポーツメディアへの接触経験をもとに、提示されたスポーツマンガのエピソードを解釈していることがうかがえる。

第二に、回答者は、画像を手がかりに、登場人物の内面を詳細に解釈していた。ここで、例 3と例 4をみてみよう。

例 3

- R（筆者：以下同様）（三橋廉が行っている9分割投球練習について）・・・
 確かに、あなたが2コマめで左上って言って、次のページで当てているのを、（私は：筆者注）大して気にもとめていなかったんだけど、よくみてたね。
- D いいところ投げるなどが、制球どおりだなと思って。ちょっとみていて気付いたんですが、この練習している、この板というのは9分割されていて、真ん中がどくろのマークがついていて、ここには投げたらいけないというふうに多分自分で思って練習していたんだろうなど。
- R どくろマークはそういうことなのか。

例 4

（前略）・・・髪を切るというのは、女の人にとって髪って大事なものと僕は思ってるんで、そこを切って気合を入れるというのは、すごい決意の表れじゃないかなって。それを表現するには一番、女性だからこそ、まあ男性女性で分けるのもどうかと思うんですけど。ちゃんとやるという、しっかり向き合っていくという決意が表れているんじゃないかなと思いました。（G）

例3において、Dは、『おおきく振りかぶって』で三橋廉が自宅庭で練習に使っている、ストライクゾーンの大きさと9分割の線が引かれた板にかかれた「どくろ」の絵の意味について、三橋がストライクゾーンの「ど真ん中」に投げてはいけないと考えているのではないかと解釈していた。つまり、「どくろ」の絵はタブーの象徴ととらえられている。

また、Gは、『少女ファイト』で女子バレー部員・小田切学が髪を切ったことについて、「女の命」である髪を切ることは彼女自身の覚悟のあらわれである、

と解釈していた（例4）。Gの語りより、女性にとって長い頭髮は大切なものであり女性性の象徴である、という觀念の存在がうかがえる。

なお、回答者の多くは、そして調査者も、主人公など主要登場人物の「成長物語」にしたがって解釈を試みていることが、逐語録の分析より明らかになった。多くの回答者は、今後の物語進行における登場人物の成長の可能性に言及していた。調査者もまた、その解釈枠組みにのっとなって、作品についての語りに参加していた。

（3）「攪乱的」ジェンダー描写の解釈

本研究では、野球部の女性監督など「攪乱的」なジェンダーの描写を含むエピソードを提示した。以下では、この「攪乱的」なジェンダー描写を回答者はいかに解釈したかについて述べる。

1) 菅原鈴緒における「女性性」の強調

「あお高」を読んだ回答者は、都立あおい坂高校野球部監督・菅原鈴緒の描写について、「女性性」が強調されているのではないかと解釈していた。

回答者は皆、菅原の描写において美貌や容姿が強調されていることに言及していた。さらに、かれらは、本来は対等な関係性であるものと考えられる練習試合の相手からも対等に扱われていないことを指摘していた。ここで、例5をみてみよう。

例5

（筆者注：菅原のチームのメンバーが揃わないために試合開始が遅れることについて、それを許しつつも彼女の容姿について語り合っている相手校の指導者たちについて）・・・でも実際は、その練習試合を、ベスト16くらいの高校がすごい弱い高校と練習試合を組んでくれたっていう本当の理由が、うわさの美女監督とか、それにお目にかかりたいっていうのも、

野球以外の、異性っていう感じの、女みたいな、しかもそれにうわさって
いうのがくっついていて、しかも美女っていうのがあって、いわゆる男の
人特有の、そういうのに興味がわくみたいな、それにお目にかかりたいか
ら、そのために練習試合してもいいですよみたいな感じで、許可、承諾
みたいな、練習試合をさせてくれたみたいで描いてあって。あと、そ
の他校の監督とかコーチとかが、それなりのキャリアを積んでいて、若い
教師っていうのもあったりして、高校野球監督としての手本を見せてあげ
たい、はははみたいな感じで、冗談で言っていたりとか、そういう若いっ
ていうのもあったりキャリアがないっていうのもあったりして、下目線で、
下っていうか、上から目線みたいな感じでみて、男女差とかキャリアとい
うか仕事のなかでの上司と部下みたいな感じの差とか。（A）

上記において、Aは、菅原が、練習試合の相手校の指導者から「アイドル」
として扱われ、実力をみてもらえず、対等に扱われていないのではないかと分
析していた。その上で、Aは、相手校の指導者と菅原の関係性について、「仕
事のなかでの上司と部下みたいな感じの差」であると、非対称性な関係性であ
ることを指摘していた。

このエピソードにおいて、菅原は、男性優位なジェンダー秩序のなかに位置
づけられ、対等な指導者として扱われていない。その描写から、女性が野球選
手になったり指導者になったりすることについては、依然として障壁があるこ
とがうかがえる。

2) 百枝まりあにおける「女性性」の「超越」

一方、『おおきく振りかぶって』の西浦高校野球部監督・百枝まりあに対し
ては、回答者の多くによって、「女性性」を超越している、という解釈が行わ
れていた。少し長くなるが、例6～例8をみてみよう。

例 6

監督は女監督っていう珍しいところで、多分自分がなめられないように
っていうふうには思ってるんだと思うんですけど、そこでキャッチャー
フライにしても、多分実力を伴わせてるっていうんじゃないかな。このバツ
トコントロールとかも思うんですけど、すごい慣れてて。多分野球がすご
い好きでやってるんじゃないかなとは思いますが。(J)

例 7

R 部員たちが、野球の技術をその百枝先生が持っているということに気
付くというところなんだけど、最初はここの、この新しい部員たちは、
百枝先生についてはどんなふう考えていたと思う。

D 最初は野球の技術を見るまでは、ただの部顧問でついているだけじゃ
ないかと、多分みんなそんな認知をしていたと思うのですが、監督と
いったら、野球は男しかできないので、監督も男の選手を経て、監督
になった男の監督はみんな理想というか、それが多分当たり前じゃな
いかという頭があったから、女監督というところに、少し動揺という
か不安があったんじゃないかなというのを思いました。

R それがどこでどういったきっかけで変わる、イメージが、変わってく
るんだろう。

D やっぱこの花井君が監督に対して、女ってあり得ないだろうと言っ
たところからですね、キャッチャーフライを垂直にあげたり、ちょっ
と無理やり手作りのジュースを作ったりとか。

R (筆者注：甘夏を) 握りつぶして作った場面ね。

D そこでみんなの考えががらっと変わったんじゃないかなというふう
に思いました。

例 8

（百枝まりあの「甘夏絞り」について）

H はい、こういう激しいところを持つところが、この監督の良さなのかなという。だから女としてなめられないというか。それはほかのマンガでもあったんですよ。「ファンタジスタ」というマンガで、女監督なんですよ。でその時に、主人公のお姉ちゃんなんですかね、が監督なんですけど、そこで、こういう感じになめられてんですけど、やる時はしっかりやるみたいなのがあって、そういうところ、似てるのかなと思って。それは女の監督の良さが出てるのかなって感じました。

R なるほどね。女の監督の良さ。男の監督と比べてそこは違うというふうに感じる？

H はい。男の監督は、なんかもうスパルタですか、なあなあするかという2極のパターンしかないかなと考えると、女の人はいろんな形があるのかなというのがある。逆に斬新な部分があるというのがありました。

（中略・・・その後顧問・志賀教諭に言及）

H はい。ちょっとしたアドバイス入れるところですね。ここはまあ、ちょっとしたアクセントというか。だってこの人が何もしなかったら、この人がいる意味ないじゃないですか。だからここでちょっと登場させたのかなという。いい顧問の先生と監督のバランスというかコンビネーションがあるのかなと。これを読む感じでは今後、この球児と監督がピンチになった時の、追いつめられた時、パッと助けてくれるような役目を持つのかなという。（後略）

まず、例6において、Jは、百枝まりあは、「野球がすごい好き」なキャラ

クターであると解釈していたことに注目したい。回答者の多くは、百枝がノックバットできれいなキャッチャーフライを上げた場面に言及していた。例7において、Dは、百枝のノック技術が、部員たちの見方を変えた、と捉えていた。また、例8より、Hが、百枝の描写について、「甘夏絞り」によって激しさを表出しつつも単なるスパルター辺倒にならない点では「女性監督のよさ」を体現している、と捉えていたことがわかる。

さらに、百枝のキャラクターは、対照的な顧問・志賀教諭と並ぶことで際立つようであると捉えられていた。Hは、百枝と志賀を対照的なキャラクターと捉え、いいコンビであると述べていた。

なお、回答者が示した「百枝が女性性を超越している」という解釈は、筆者自身の解釈にも影響を及ぼした。筆者は、当初、内容分析を通して、百枝については、長髪と豊胸・ウエストのくびれといった描写から、女性性が強調されているのではないかと解釈していた。インタビューにおいて回答者が提示した、筆者自身の当初の解釈とは異なる解釈は、筆者自身に解釈の修正をもたらすものであった。

3) 陣内笛子にみる「二面性」への言及

『少女ファイト』に登場する、黒曜谷高校女子バレー部監督・陣内笛子に対しては、異なる二つの側面への言及がみられた。例9のCによる発言に注目してみよう。

例9

(前略) マンガのなかで女の人がこう監督さんだったら、なんだろう、また違う感じ。男の人だと、なんか違う感じ。分からないけど。ここでマンガってきれいな人を描く感じのイメージだから、ここで男のきれいな人

を描いたら、スポーツ系にならない気もするし、女の人だったら違うスポーツで厳しくしてるのかなみたいな。(C)

ここでは、Cは、常に黒い着物（喪服）を着用している陣内について、「きれい」とコメントした上で、男性で「きれい」な人を描くとスポーツ系にならない気もする、と述べている。その一方で、Cは、常に着物を着用している外見と対照的な、陣内の指導の厳しさにも言及している。

つまり、Cは、陣内笛子における「美しさ」と「厳しさ」の二つの面を捉えた上で、この二面性は男性のスポーツ指導者の描写にはみられないのではないかと、と解釈している。

以上に示した、各作品における女性指導者の描写をめぐるインタビューから、次のことが考えられる。

まず、インタビューでも、内容分析と同様に、その作品世界における彼女たちの「異質性」あるいは「他者性」が浮かび上がっていた。ただし、この「異質性」「他者性」に対する解釈は、作品における描写の仕方によって、また回答者の視点によって、異なるものとなった。

たとえば、非対称なジェンダー秩序を打ち破るかのように見える女性指導者の描写は、新しい指導者像として捉えられるとともに、「女性」ならではの指導者像であると捉えられていた。とくに野球部において珍しい「女性監督」の描写は、既存の指導者像を変えるものであると解釈されていた一方で、女性性が強調され、男性優位の非対称なジェンダー秩序のなかに位置づけられていると解釈されていた。

以上より、攪乱的なジェンダー表象に触れた時、筆者と回答者はその中にジェンダー秩序の変容を見いだすとともに、その描写の中にあるジェンダー秩序の維持を読み解くことができることが推測できよう。それは、そのジェンダー表

象に内在する秩序を浮かびあがらせると同時に、筆者と回答者を含む読み手に刻印されたジェンダー観念をあらわにする作業であると考えられる。

(4) メディア内容と現実世界の比較

中高時代にスポーツの部活動を経験した回答者は、作品について、現実世界との比較で解釈を行っていることがうかがえた。少し長くなるが、例 10 および例 11 をみてみよう。

例 10

B このマンガは一話しか読んだことがないので、登場人物の関係性がいまいよく分からないのですが、このトレーナーになった男子バレー部の式島滋君という登場人物が加わることによって、またこのストーリーが全然違うものになっていて、全部自分の高校時代のこととの比較になってしまうのですが、女子校だったので、男子のトレーナーの先生はいたのですが。

R トレーナーの先生はおられた。

B 外部の委託の先生はいらっしゃったのですが、同じ選手として、同じ年代のほかの男子バレー部で頑張っていた選手がいきなり今日から女子バレー部のマネジャーというか、トレーナーになるのは、それほどうなんだりかなというの、ちょっと思ったところはあって。

R ちょっとどうかなど。

B ちょっとどうかなどというのがあって、実際最後のほうで恋愛に発展しているみたいなのがあるじゃないですか、そういうのもチームのなかでその子だけ特別になってしまうようなところがあるのじゃないかなというのがありました。

R 恋愛の要素がちょっと紛れこんでくるかなと。

- B このバレー部自体のレベルが、スポーツ科があるぐらいだから、すごくレベルが高いバレー部なんだろうなと思うのですが、だいたいのレベルが分からないので、あれなのかなと思ったのですが。この高校はスポーツ科の入学早々全日部活動週間というのがある割に、陣内監督はレギュラー以外は降格（と言っている：筆者注）というのも、さすがマンガだなと。

例 11

- R なかなかこういう菅原鈴緒のような監督。先ほど女性はなかなかいないという、グラウンドに入れないから、女が監督をするというようなことも、なかなか例外のような感じに見えるという話だったけれども。この菅原鈴緒のような監督の下で野球をやってみたいと思う？
- I そうですね。どうしてもですよ、やっぱり自分のなかでは、こんなことを言うてはいけないのかもしれないんですけども、経験上やっぱり監督は男であるものじゃないですか。だから、もし甲子園に行くなら、女の監督はやっぱりあり得ないかなと。自分の考えはそうですね。
- R うん、もちろんこれは自分の考えを聞くところだから。それで問題ない。なるほどね。もし、甲子園に行くんだったら、男の監督が。
- I それはやっぱり世間のレッテルだと思うんですよ。
- R なるほどね、世間のレッテル。
- I それはやっぱりあると思うんですよ。だからみんながどう思うか。本気で甲子園を目指そうと思ったら、やっぱり練習していても、試合でしか学べないことってあると思うんですよ。練習じゃなくて試合でしか学べないこと。それをやっぱり学べていないところもあるじゃないですか。高校時代に試合に出られていない。
- R この菅原鈴緒監督自身がってことね。

- I そうです。監督で一番大切なことは自分の経験だと思うんですよ。「あ、このときああしたな」とか、「ああ、自分の時代はこうだったな」とか。その経験を生徒に教えることも監督の役目だと思うし、「今の時代はこの状況はこういうことをするんやな」とかいうことも頭に取り入れておかないといけないじゃないですか。そういうことを考えるとやっぱり。
- R なるほどね。そういう意味では、実際に野球をすること自体が制限されている女の人が監督をするということは、本気で甲子園に行くんだったら、ちょっと難しいんじゃないかということなのね。
- I そうですね。それでもあと10年ぐらいして、女の監督が増えてきて、甲子園に女の監督で行ったとかなれば、話はまた変わってくると思うんですよ。

まず、現実世界とマンガの世界にはギャップがあることへの言及がみられた。たとえば、Bは、自身の経験を踏まえ、マンガの設定が現実とかけ離れていると述べた。具体的には、バレー部で男子生徒が女子部のトレーナーになることはありえないことや、またスポーツに力を入れる高校において「文武両道」をルール化することは現実には困難であることを指摘した上で、「さすがマンガ」と、マンガ世界と現実世界のギャップを表現していた（例10）。

また、中高時代に野球部に属していたIは、野球の女性指導者の実現性について、甲子園に行くような学校では現時点ではありえない、という見解を示している。Iは、女性が野球部の強豪校で指導者になりえない理由として、「世間のレッテル」や「経験」が不足していることを挙げた（例11）。

しかし、その一方で、今後女性のスポーツ指導者が増えないわけではないだろう、という見解が、複数の回答者によって示されていた。たとえば、前述のIは、現実には野球の女性指導者は難しいものの、「あと10年ぐらい」たてば

女性指導者が増え、状況は変化するのではないかと予想している。

5. 要約および考察

（1）要約

本インタビューの分析結果の要約は、下記の通りである。

第一に、回答者自身による、スポーツメディアへの接触経験は、自分が行う競技のマンガ、当時の人気マンガ、マンガ以外のスポーツメディア、の三つのパターンに分類できる。スポーツメディアへの接触は、スポーツ経験の有無に関係なくみられる。

第二に、回答者によるマンガ作品の読み取りは、自らの経験に照らして行われ、画像の描写から登場人物の内面を読み取ること等によって行われる。

第三に、回答者による女性指導者が登場するスポーツマンガ作品の読み取りより、3作品の女性指導者は、それぞれ、「女性性」の強調、「女性性」からの超越、「女性性」と「厳しさ」の二面性、といった異なる特徴を示している。

第四に、回答者にとって、女性指導者の描写をはじめとする作品に描かれる世界は、現実世界との間にギャップがあると考えられている。

（2）考察

1) 調査者－回答者による相互解釈としてのインタビュー

本インタビューにおける読み手＝回答者の語りを分析した結果より、回答者は、自身の生活経験に根ざして作品世界の解釈を行っていたこと、さらにそれを調査者＝筆者との相互作用を通して「スポーツマンガにおけるジェンダー」というテーマに自身の解釈内容を関連づけつつ更なる解釈を行っていた、ということが示唆される。

第一に、作品におけるさまざまな画像情報や言語情報は、回答者の自己経験

を通して、選択され、解釈されていることが示された。とりわけ、スポーツ経験者は、当該スポーツ経験との関連づけで、作品世界のなかのスポーツ表象を解釈していた。

第二に、「攪乱的」なジェンダー秩序を描写したマンガ作品を介しての回答者と調査者との相互作用は、作品中の女性指導者が表出する「女性性」が多元的であることを明らかにした。その一方で、スポーツにおける女性指導者の実現性に関する回答者と相互作用の相互作用は、現実のスポーツ界におけるジェンダー秩序と作品世界におけるそれとの間にギャップがあることを明らかにした。

以上より、本インタビューは、回答者と調査者の相互作用によって、作品世界の背景にあるジェンダー・ディスコースをあぶり出したと考えられる。

第三に、インタビューの分析を通して、スポーツマンガの解釈が、回答者のスポーツなど過去の経験によって多様であることが示唆された。同じエピソードを与えられた読み手は、自身のスポーツ経験の有無または程度によって、エピソード内に描かれた競技と自分が行う競技が同じであるか否かによって、また他のマンガへの接触経験によって、それぞれ異なる解釈を行っていた。また、「おおきく振りかぶって」の百枝まりあをめぐる描写について調査者と回答者で解釈が異なっていた例から、調査者と回答者の間にはしばしば解釈のずれがみられることがうかがえた。相互作用における解釈のずれもまた、インタビューにおける解釈の発展の源泉となりうるものだろう。

(3) 今後の課題

一方、これまでの研究を通して、いくつかの課題が浮かび上がってきた。

筆者は、これまでの研究（藤田，2015ほか）を通して、ある人の身体形成経験が、その人の世界観や社会意識に重要な影響をもたらしうることを「質的」に明らかにしたいという問題意識を持つに至った。本稿は、その一端として、

「スポーツを通しての人間形成」を、「ジェンダー」の視点より、質的調査によって明らかにしようとする試みであった。しかし、それは、本稿において達成できたであろうか。ここで、本研究を通して得られた二つの課題について述べる。

第一の課題は、研究方法論に関するものである。「スポーツを通しての人間形成」は、家庭でのスポーツ経験、家族のスポーツ歴、スポーツをめぐる地域文化、本人のスポーツ実践、本人のスポーツに関するメディアへの接触、など、多種多様な経路によってなされる。

本研究、とりわけ本稿で提示したインタビューは、その一部として、スポーツに関するメディアによって媒介される本人のスポーツおよび身体形成経験の一端を提示しようとしたに過ぎない。また、インタビューの回答者についても、スポーツ経験者が中心であったという点で、限界がある。

したがって、今後は、たとえばスポーツに親しむことができなかった人も含め⁵⁾、より多様なスポーツ経験を持つ人も回答者に含める必要がある。そして、自由インタビューなどの手法を用いて、多元的な「スポーツを通しての人間形成」を明らかにする試みも求められるだろう。

第二の課題は、「ジェンダー」をめぐる多元性への視点である。本研究は、スポーツとジェンダー研究の問題意識として「男性優位性」が今なお重要である、という視点に立っている。しかし、この視点は同時に、「二分法」に還元されない多様なセックス／ジェンダー／セクシュアリティを等閑視する、という問題も孕んでいる。

今や、ジェンダー・セクシュアリティ研究においては、性の多様性に踏み込んだ研究の蓄積が豊かになりつつある⁶⁾。日本では、21世紀に入り、LGBT、セクシュアル・マイノリティ、性同一性障害をテーマに、論考が行われるようになった。しかし、今なお心理学研究や医学研究が多いのが実状である。スポーツ社会学またはスポーツとジェンダー研究においては、LGBTまたはセクシュアル・マイノリティの問題に注目した研究は2010年以降に少しずつ行われる

ようになった⁽⁷⁾。しかし、セクシュアル・マイノリティまたはLGBTの問題を正面から取り上げた教育社会学的研究は、2010年代に入りわずかではあるが論文発表が行われるようになった（土肥，2015）ものの、日本ではまだあまり多く行われていない。

一方、教育現場では、セクシュアル・マイノリティへの対応が求められつつある。文部科学省は、「性同一性障害」への対応実態に関する調査を2014年度に実施した。その結果を踏まえ、文部科学省は、2015年4月に「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」、2016年4月に「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」、という通達を出した⁽⁸⁾。セクシュアル・マイノリティをめぐる言説が学校現場にいかん浸透し、いかん用いられているか。そして、体育を含む教育課程や教育実践において、それらの言説がいかん作用するか。これらは、教育社会学においても重要な課題である。

以上の課題を踏まえると、今後、スポーツ社会学や教育社会学においても、「二元論」に還元されない、スポーツを通しての人間形成におけるジェンダー・セクシュアリティの問題を検討することがさらに求められる。そのためには、今後も、教育現場との連携による地道な調査研究の蓄積が求められる。

注

- (1) 本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダー・セクシュアリティおよびその解釈」(研究代表者：藤田由美子，課題番号：21510298)の研究成果のひとつである。本研究で、インタビューに協力してくれた回答者の皆さん、また関係者の皆さまには、心より感謝の意を表したい。
- (2) とくに、野球というスポーツは、その誕生当初より、男性性と結びつけられてきた歴史を有する。たとえば、女子野球の歴史研究においては、男性領域に対する侵犯に対する抵抗がみられたことが示唆されている(花谷・入口・太田，1997)。
- (3) セジウィックは、イギリス文学作品の分析を通して、イギリス社会における男のホ

- モソーシャルな欲望を明らかにすることを試みた (Sedgwick 訳書, 2001)。ホモソーシャルという語は、ホモセクシュアルと類似すると同時に区別される用語である。男のホモソーシャルな欲望 (男同士の絆) は、ミソジニー (女性嫌悪) と同時に、ホモフォビア (同性愛嫌悪) も有している。したがって、女のホモソーシャルな欲望 (女同士の絆) に比べ非連続である。女のホモソーシャルな欲望は必ずしもホモセクシュアルとは真っ向から対立するとは限らないからである。
- (4) 回答者の内訳は、20歳代の大学生10名、成人2名、社会人学生1名であった。しかし、成人および社会人学生は、20歳代の大学生とは生活歴や社会的文脈が異なっていることから、本稿における分析の対象からは除外した。
- (5) 藤田 (2009) は、スポーツに親しむことができなかつた一方で学校スポーツに適応しようとした筆者自身の経験の社会的意味を、スポーツと学校文化の問題とジェンダーの視点より考察したものである。自己経験の社会学的考察の意義については、稿を改めて論じたい。
- (6) 欧米諸国において、2006年の「ジョグジャカルタ原則」(正式名称: Yogyakarta Principles on the Application of International Human Rights Law in Relation to Sexual Orientation and Gender Identity) によって、政策におけるセクシュアル・マイノリティの人権への配慮が促進されたことも、近年の研究増加の背景にあるものと考えられる。
- (7) なお、日本体育協会が2013年に策定した『スポーツ指導者のための倫理ガイドライン』では、「年齢、性別、性的志向や性自認、障がいの有無、国籍、文化、言語、民族、人種、宗教などの違いを理由とする、いかなる差別的な言動もしない、許さない」(p.11) と、性の多様性への言及がなされている。(URL http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudoushishin/doc/rinri_guidelines.pdf, 2017年3月21日閲覧。)
- (8) ただし、戸籍上の性の変更を前提とする「障害」であることを含意する「性同一性障害」の語が使用されていること、2017年2月公表の学習指導要領案にて性の多様性に配慮した記述が見送られた(例: 特別活動において「男女相互の理解と協力」という記述がみられる)等、教育現場における性の多様性への配慮に関して、課題は今なお山積している。

参考文献

- Aitchison, Cara Carmichael, 2007, *Sport & Gender Identities: Masculinities, Femininities and Sexualities*, Routledge.
- 在木美粧・飯田貴子, 2004, 「学校体育におけるジェンダー形成 ——大学生のメモリーワーク分析から——」『スポーツとジェンダー研究』2, pp.17-30。
- Blaise, Mindy, 2005, *Playing It Straight: Uncovering Gender Discourses in the Early Childhood Classroom*, Routledge.
- Butler, J., 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge (= 1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル ——フェミニズムとアイデンティティの攪乱——』青土社)。
- Connell, R. W., 1987, *Gender and Power*, Polity Press (= 1993, 森重雄, 菊地栄治, 加藤隆雄, 越智康詞訳『ジェンダーと権力 ——セクシュアリティの社会学——』三交社)。
- Davies, Bronwyn and Gannon, Susanne (eds.), 2006, *Doing Collective Biography (Conducting Educational Research series)*, Open University Press.
- 土肥いつき, 2015, 「トランスジェンダー生徒の学校経験 ——学校の中の性別分化とジェンダー葛藤——」『教育社会学研究』第97集, pp.47-66。
- 江刺正吾, 1992, 『女性スポーツの社会学』不昧堂出版。
- 藤田由美子, 2009, 「スポーツから距離を置く『私』 ——もうひとつの「スポーツとジェンダーの教育社会学」の試み——」日本教育社会学会第61回大会, 早稲田大学, 当日報告資料。
- 藤田由美子, 2011, 「スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察 ——野球マンガにおける女性監督の分析より——」『九州保健福祉大学研究紀要』12, pp.69-78。
- 藤田由美子, 2012a, 「スポーツマンガに描かれたジェンダー文化 ——女子バレーボールを題材に——」『九州保健福祉大学研究紀要』13, pp.47-56。
- 藤田由美子, 2012b, 「スポーツマンガの読みの構造 ——ジェンダーの攪乱／維持をめぐる解釈的インタビューの分析より——」日本教育社会学会第64回大会, 同志社大学, 当日報告資料。
- 藤田由美子, 2015, 『子どものジェンダー構築 ——幼稚園・保育園のエスノグラ

フィ—』ハーベスト社。

- Hall, M. Ann, 1996, *Feminism and Sporting Bodies: Essays on Theory and Practice* (= 2001, 飯田貴子, 吉川康夫監訳『フェミニズム・スポーツ・身体』世界思想社).
- 花谷健次, 入口豊, 太田順康, 1997, 「女子『野球』に関する史的考察(Ⅱ) ——日本女子野球史——」『大阪教育大学紀要 IV 教育科学』45(2), pp.289-302.
- Hargreaves, John, 1986, *Sport, Power and Culture: A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain*, Polity Press (= 1993, 佐伯聰夫, 阿部生雄(共訳)『スポーツ・権力・文化 ——英国民衆スポーツの歴史社会学——』不味堂出版).
- 羽田野慶子, 2004, 「〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか ——スポーツ実践とジェンダーの再生産——」『教育社会学研究』75, pp.105-125.
- Holstein, James A. and Gubrium, Jaber F., 1995, *The Active Interview*, Sage Publication (= 2004, 山田富秋, 兼子一, 倉石一郎, 矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー ——相互行為としての社会調査——』せりか書房).
- 飯田貴子, 2003, 「新聞報道における女性競技者のジェンダー化 ——菅原教子から梶崎教子へ——」『スポーツとジェンダー研究』1, pp.4-14.
- 飯田貴子, 2005, 「オーディエンスの多声性とジェンダー対抗的自己形成 ——女性競技者の新聞報道分析——」『スポーツとジェンダー研究』3, pp.26-41.
- 飯田貴子, 2008, 「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在 ——デスクへの調査から見えてくるもの——」『スポーツとジェンダー研究』6, pp.15-29.
- 河口和也, 2003, 『思考のフロンティア クイア・スタディーズ』岩波書店。
- 国枝タカ子・松柴由里, 2009, 「スポーツマンガに関する記号論的研究 ——グレマス
の手法による『エースをねらえ』の分析——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』
58, pp.83-105.
- Laslett, Barbara and Thorne, Barrie (eds.), 1997, *Feminist Sociology: Life Histories of a Movement*, Rutgers University Press.
- Sedgwick, Eve K. 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press (= 2001, 上原早苗, 亀澤美由紀訳『男同志の絆 ——イギリス文学とホモソーシャルな欲望——』名古屋大学出版会).
- 清水諭, 1998, 『甲子園野球のアルケオロジー ——スポーツの「物語」・メディア・身体文化——』新評論。

谷本奈穂, 1997, 「マンガ世界を通してみるユースカルチャー ——内容分析の読者志
向的解釈——」『大阪大学教育学年報』2, pp.61-75。

Turner, Bryan S., 1984, *The Body and Society: Explorations in Social Theory*. Basil
Blackwell. (= 1999, 小口信吉, 藤田弘人, 泉田渡, 小口孝司訳『身体と文化
——身体社会学試論——』文化書房博文社).